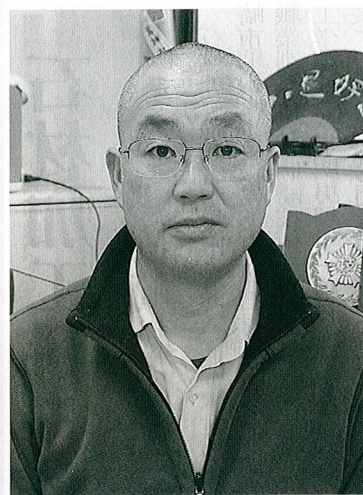


須藤石材(株)東京本社ショールームに展示されている石見本



篠原石材工業(有)・篠原 雅之 社長

ピシヤン仕上、小叩き仕上など、加工方法によって石のさまざまな表情を引き出していったわけです。小目・中目が本来持っている味わいを、我々はもつと引き出せるのではないかと考えています。

池袋にある須藤石材東京本社1Fのショールームには、異なる6種類の加工方法による石材見本が展示されている。林理事長も「個人的には中目の割肌などは非常に趣を感じますし、小目にしてもバーナー仕上や水磨きになると、ひと味違った雰囲気が出ています」と語る。

「私どものところは展示場がないので、既に建っている墓石が見本です。20、30年経った石も当然ありますが、ツヤがさめないですね。そういう墓石を見てもらうことで施主さんにも安心してもらっています」と篠原氏は言う。

また、加工におけるリスクが少なく、扱いやすいという点も真壁石の特性といえるようだ。「昔は自社で手加工もしていましたが、堅牢な割にはねばりがあり、ノミをあてても角が飛ばない石です。価格の手頃さと共に加工のしやすさも、小目・中目が昔から数多く使われてきた理由だと思えます。また、中には石塔の正面を決めるのが難しい石種もありますが、小目の場合はほとんど悩みませんね」。

「真壁石の魅力はなかなか言葉では表現しにくいですね」と語るのは地元の真壁の株式会社千石匠(所在地:茨城県桜川市)の千々松滋社長である。「特に山で石を割った時の、みずみずしい独特の青みは、何ともいえない美しさがありますよ」。

同日では、去る3月9日、10日、東京都表参道のセレクトショップ「Rin」にて「和のあかり」の展示会を開いた。真壁石を中心に、つくば石、本小松石、庵治石、伊達冠石などの国産材を用いた作品が多数展示された。割肌や野面なども採り入れながら、石工の多様な技を施した作品は、あえて磨きを少なくし、石そのものの質感がうまく表現されている。野趣はあるが無骨ではなく、細部も丁寧仕上げられており、作品のフォルムのバランスも良い。話を聞くと、驚いたことに設計図やデザインスケッチなしで制作しているとのことであるが、職人の洗練されたセンスが感じられる。

日本庭園はもちろん、洋風庭園や家の玄関先に置いても違和感なく調和する作品も多いようだ。「目新しいものに人はすぐ飛びつきますが、飽きが来るのも早い。そして、やがて本物を求めたくなるわけです。今回の展示会も、真壁石をはじめとした日本の石の良さを少しでも知ってもらいたい、地場産業の発展につながればと考えてやっていますし、息子が跡を継ぐことになったので、新しい試みをやらなければという思いもあります」と千々松氏は語る。

また、石の良さは吸水率という数値だけでは計れないという。「真壁石も呼吸して生きていますから、水を吸っても、抜けていきます。やはり国産の石は、日本の気候風土に良く合っているんですね」。

「磨かないのは手間がかかりますし、確かに汚れは付きやすいのですが、水を吸っても目立ちませんね」。



(株)千石匠・千々松 滋 社長(左)と千々松 広茂 専務(右)



都内のセレクトショップで展示された(株)千石匠の作品

の報告はなく、ほとんどの石材業者は稼動し、むしろ通常以上の需要に悩んでいるところが多いとある。

今回の大震災の不測の事態に対し、真壁石は頼もしい存在。真壁には、石の山があり、製品できる工場があり、さまざまな要望に対応腕のある職人がいるという環境が真壁石と相まって、ここにも日本の石材業界の強みとなっており、おそろしくも関東を中心とした需要にこたえていく。

「真壁石の魅力はなかなか言葉では表現しにくいですね」と語るのは地元の真壁の株式会社千石匠(所在地:茨城県桜川市)の千々松滋社長である。「特に山で石を割った時の、みずみずしい独特の青みは、何ともいえない美しさがありますよ」。

同日では、去る3月9日、10日、東京都表参道のセレクトショップ「Rin」にて「和のあかり」の展示会を開いた。真壁石を中心に、つくば石、本小松石、庵治石、伊達冠石などの国産材を用いた作品が多数展示された。割肌や野面なども採り入れながら、石工の多様な技を施した作品は、あえて磨きを少なくし、石そのものの質感がうまく表現されている。野趣はあるが無骨ではなく、細部も丁寧仕上げられており、作品のフォルムのバランスも良い。話を聞くと、驚いたことに設計図やデザインスケッチなしで制作しているとのことであるが、職人の洗練されたセンスが感じられる。

日本庭園はもちろん、洋風庭園や家の玄関先に置いても違和感なく調和する作品も多いようだ。「目新しいものに人はすぐ飛びつきますが、飽きが来るのも早い。そして、やがて本物を求めたくなるわけです。今回の展示会も、真壁石をはじめとした日本の石の良さを少しでも知ってもらいたい、地場産業の発展につながればと考えてやっていますし、息子が跡を継ぐことになったので、新しい試みをやらなければという思いもあります」と千々松氏は語る。

また、石の良さは吸水率という数値だけでは計れないという。「真壁石も呼吸して生きていますから、水を吸っても、抜けていきます。やはり国産の石は、日本の気候風土に良く合っているんですね」。

今回の大震災の不測の事態に対し、真壁石は頼もしい存在。真壁には、石の山があり、製品できる工場があり、さまざまな要望に対応腕のある職人がいるという環境が真壁石と相まって、ここにも日本の石材業界の強みとなっており、おそろしくも関東を中心とした需要にこたえていく。



3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により、真壁の地域でも展示場の墓石や燈籠が倒れるなどの被害があり、地震発生から10日経過した段階でも、余震による不安のほか、ガソリンなどの燃料不足、接着剤などの材料不足の問題がある。ただ、幸いにも真壁石材協同組合には人的被害